

のように写し出し、技巧を全く感じさせない。フッドが描き出したものは、人々であり、家々、芝生、川、そよ風であるが、それだけでなく圧力と欲望と幻影と信仰——つまりひとつのカナダ社会がそこに描き出されている。マットが恋人のことを語る部分を見よう。

「(そうしたことの)全てが僕の頭の中にいる彼女のイメージを高めた——王女のような、気高く、女神にも似た、まるで妖精のような姿だった。僕にとつてはとても魅惑的で、しかも何艘ものボートとボートハウスをもった女の子だった。ボートにボートハウス——数年前までは僕もどんなに欲しいと思ったことか。つまり、僕が彼女に初めて会った時、僕はひどい俗物だったのだ。そうだその通りだ。僕が彼女にひかれたのは、彼女の容貌や振舞いのためでもあったし、彼女のボートハウスのせいでもあったのだ……」

「A New Athens」は、十二冊からなるシリーズ作品の二冊目で、第一作は、「The Swing in the Garden」。後の十冊も大いに期待されるところである。

◇チャールズ・テンブルトン「Act of God (神の行為)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七七年刊

この作品で著名のテンブルトン氏は、スキヤンダラスなプロットを採用した。氏自身はカナダ人だが、小説の舞台はローマ、ロンドン、そしてニューヨーク大司教管区と世界各地にとび、ドラマの大半は枢機卿の家で展開される。(これはいわゆるモデル小説ではない。主人公の枢機卿が故フランス・カーディナル・

スベルマンでも今のテレンス・カーディナル・クックでもないことは明らかだ。)中世イタリアの枢機卿でなく、現代のアメリカ系アメリカ人枢機卿なのだが、どうやらこの主人公は殺人犯らしい。しかし彼は高名な長老派の説教者の家に生まれ、長ずるに及んでローマカトリックへ改宗しており、殺人者らしくないし、殺人者であったとしても、世界教会的な殺人者ではなさそうである。

彼がもし殺人者だとしたら、一体どんな動機が考えられるのか。

答えはすばらしく簡単——イエス・キリストの骨がその答えだ。

もしここに一人の考古学者がいて、イスラエルのとある丘の中腹の洞窟でイエスのものだと証明できる骨を実際に見つけたとしたら、あるいは見つけたと主張したとしたら、イエスは死から甦ったというキリスト教の根本教義は、一体どうなるだろうか。だがもしも、そのような発見や主張を知っているのはただ二人だけ——秘密主義の考古学者と彼のプリンストン大学時代の学友である当の枢機卿——だとしたら、枢機卿はどうするだろうか。

テンブルトン氏は巧みなストーリーテラーである。物語の二重の謎をとくのは、ここに登場する濃厚な探偵たちの一人。まだ若さを残した中年の独身男で、地区検事の椅子にも興味があるが、枢機卿の美しい姪にも気のあるという人物である。

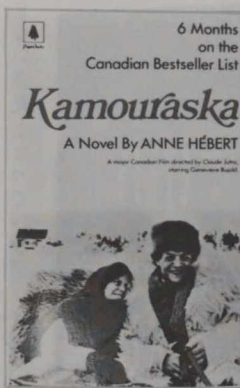
◇アン・エベール「Children of the Black Sabbath (ブラック・サバトの子供たち)」(キャロル・ダンロップ・エベール訳)

マツソン・ブック社、一九七七年刊

アン・エベール作「Kamouraska」は、素晴らしい映画にもなった秀作だが、今度はその英語版が「Children of the Black Sabbath」として出版された。

この小説は、短いが力強い作品で、前述の「Act of God」と同じようにある種の不敬虔な匂いを持っている。主人公は三位一体派の尼僧ジュリー。「高貴なる血」派に属する彼女は、簡単に言えば、悪魔にとりつかれた尼僧である。

これは孤独で、狭い世界の、しかも強烈かつスリリングな物語である。狭さというところが唯一の欠点といえはいいえかもしれない。修道院の個室の殻にとじこもった悪魔つきの尼僧の話が、より広いケベックの話とうまくつながればいいと思う読者がいるかもしれない。尼僧ジュリーの心の中に跳梁する人々のほかにも、全く違った行為の世界に住む独立した人も登場させればいいのに、と思う人もいであろう。



◇ポーリン・ゲッジ「Child of the Morning (朝の子ども)」マクミラン、一九七七年刊

「Child of the Morning」は、日頃台所や速記者の溜り場に閉じこめられている人にとっては楽しい休息をもたらす、そんな作品である。これもテンブルトンの「Act of God」と同様、ベストセラーの

条件満々だ。アルバート州ハンナ出身のポーリン・ゲッジはこの作品で原稿にして四〇三枚を書き上げた。これは古代エジプトの唯一の女性統治者ファラオ・ハットシェプスートの物語である。ハットシェプスートは二十年にわたり見事な統治を行なったが、彼女の後継者であり異母兄弟であり夫であり欲求不満の求愛者でもあるトトメスにより記念碑からその名を削りとられ、その平和な時代の記録を焼かれてしまった。

「Child of the Morning」は、かつて(果敢な)女の小説」とされたものの範疇に入るかもしれない。確かにハットシェプスートは史上最初の婦人参政権論者だったが、同時に歴史物語の古典的なヒロインでもある。文章は濃厚で香り高く、まるでナイルの川のように、時にその堤からあふれ出し、読者をして快い興奮の渦の中にひたらせてくれる。

「彼はさっと立ち上った。グラスが手から落ち、赤いワインが床に飛び散った。たったの二歩で彼女の傍までくると、歯をむき出し、うなるように言った。「王位など関係ない。王位がほしけりや、明日にでも手に入る。」

「それは嘘よ。彼女は落ち着き払っていった。「あなたにはまだそんなことはできっこないわ。自分でもそれはご承知のはずよ。なぜここにいるの、トトメス。何が欲しいんです。」

彼は空のグラスを彼女の手からひたくと、部屋の隅めがけて投げつけた。彼女の腕をぐいと掴んで背中しまわし、彼女のからだを自分の方に引寄せ、荒荒しく言った。「お前だ。わしが欲しいの